第 22 回　私にとっての素敵な茶人
父 田中仙翁

みなさんと一緒に素敵な茶人を目指しましょうと、身の回りの些細なことを取り上げて、それを膨らませて参りました。

このたび、父との別れを経て、改めてわかったことがありました。それは、みなさんにお示ししたかった私の中の素敵な茶人のイメージは田中仙翁だということです。

何を今更と、たびたび父の言葉を引き合いに出していたのですから、当然でしょうとおっしゃる方も多いと思いますが、気づきと言うものは案外時間を要するもののようです。

父仙翁は「気づく.感じる、慮る」と言う点において本当に真似をしたくなるような配慮の人でした。茶会などの際にも、その場の状況、相手の様子を受け止めて、常にそれにベストの心で応えようとしておりました。

なかなかその気持ちは理解することが出来ずに、決めた事なのに突然に変更して、とそれまでに打ち合わせてきた事前の進行を突然変更することに、疑問を呈しておりました。

最近の自分の行動を振り返ると、まさに、臨機応変に対応が出来ることこそが、人をもてなすことが出来ると考えているようで、設えを直前に変更したりなど周りの方に、父以上に迷惑をかけているようにも思えます。

どこかで、その場その場でよく判断して、応対を柔軟に変化させることが出来ると考え、目指しています。とらえようによっては、いい加減だとか、多くの人と一緒に茶席を持っていたら迷惑なことだと言われそうですが、人としての本来あるべき姿なのかなと思います。

「マニュアル」という言葉が流行った時期には、父は本当に細かく、茶席の中での応対のマニュアルを水屋の人のために作っていました。自分の考えをよく理解したうえで、もっと人間味のあるはらたきのある行動を全員で取りたかったからでしょう。しかし、細かく作るマニュアルは、マニュアルでしかなく、返って人を縛り付けるものになってしまったようにも思えます。茶で稽古をするということは、もてなす基本を心に育てることなのかもしれません。それが育ち花が開くと、柔軟な気づき、人を大切にできることなのでしょう。縛られない自由な父の姿から改めて学ぶ、素敵な茶人の形かと思えています。

平成 29 年 8 月発行　「えんじゅ 92 号」掲載